

安岡章太郎隨筆集
3



安岡喜一郎隨筆

江

学院图书馆
书章

安岡章太郎隨筆集 3

第一回配本(全八卷)

一九九一年六月三日 第一刷發行 ©

定価四二〇〇円
(本体四〇七八円)

著 者 安 岡 章 太 郎
やす おか しょう たろう

発 行 者 安 江 良 介
やす えい らう けい

発 行 所 〒101-02 東京都千代田区二ツ橋二丁目五
株式会社 岩 波 書 店
電話 〇三三六五四二二(案内)

印刷・精興社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-091663-7

目次

井伏鱒二

井伏さんとマタタビ	3
知らぬが仏	6
『鯉』の想い出	9
井伏文学の洗脳力	10
ふるさとへ帰る	13
井伏鱒二	26
色調の下に	59
朝焼け夜空	72
おかしみに就いて——『小黒坂の猪』	77
井戸の底から	80

好きな詩	99
井伏鱒二の文章と歴史	102
『海揚り』	120
抑え難い魅力——『海揚り』	122
『荻窪風土記』	125
『鯉』について	127
『軈ノ津茶会記』	139
鶏のいる風情	141
事実と真実	145
『仕事部屋』——せめぎ合う羞恥心と情熱	155
第三の新人	
吉行淳之介	163
三番センター庄野潤三君	192
近藤啓太郎の親切心について	210
『抱擁家族』の頃	225

遠藤周作のウソとマコトについて	229
-----------------	-----

あの人、この人

クサリガマ伝説	247
一つの飢餓感	251
山川方夫君のこと	257
練馬大王梅崎春生の死	262
大江君の体操	279
顔の印象	282
詩人の肖像	288
散歩者の孤独	307
川端さんの笑顔	311
北原さんのこと	315
欲望について	320
河上さんと郷土	323
年々歳々	328

後記	通信
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・
34 ¹	33 ²

井伏鱒二

井伏さんとマタタビ

吉岡達夫につれられて、はじめて井伏さんのところへうかがったのは、五年まえの初冬である。そのころ僕は恋愛病にかかっていたので、はなはだ落ち着きを欠いていた。誰の顔をも、みても、

「結婚はすべきでしょうか、すべからざるものでしょうか？」と、愚の典型ともいべき質問を発していた。井伏さんにも同じことをうかがうと、「そうだね、故郷のあるひととなら、ぼくは結婚してもいいね」とこたえられた。

そう云われると、僕は自分の恋愛の相手が故郷をもっているかどうかが大そう気になり、ついでに自分自身にも果して故郷と呼べるものがあるだろうかと心配になった。そして井伏さんは、いかにも故郷のある落ち着いた人柄にみうけられた。

東南に廻り縁のある八畳の間を書斎にして、その西南のすみに大きな仕事机が目についたが、それは故郷の生家からとりよせられた松の一枚板でつくられているということだった。引き出しも何もなくて裁縫の職人がつかう裁ち板にも似ていたが、赤味のさした木の肌合いも、ムダのないかたちも、見るからに使い心地のよさそうな机だった。

「家の物置に、まだ板がのこっているから、その木で小沼丹君と吉岡君が同じ机をつくらうとしている」とのことだった。僕は小沼、吉岡両君が羨ましいと思った。

その日は、ひる過ぎにうかがって、中央線の上りの終電にやっと間に合うころまで邪魔した。僕は長尻の方で、よそへ行っても一度話がはじまると簡単には切り上げられない性分だが、それでもこのような大先輩のお宅にうかがって、こんなに長時間はなしこんだ経験は、これまででない。夕刻から角川書店の松原氏が見えて、いっしょに奥さんの手料理で御馳走になったが、そのとき一番印象にのこっているのは、ビン詰のマタタビである。薬屋で売っているのは干した茶色のものだそうだが、これは青くてオヤ指のあたまほどの、芽キャベツのようなものだった。齧ると青臭いにおいがして、苦味がある。

「これを置いておくと、どこからか猫がやってきて、一つやると、こうしてよろこびます」と、まるで肥った手先きを曲げて、鼻のさきにこすりつけるようにしながら、眼を細くして笑われたが、その顔がまるでネコのように見えた。

「君は、からだが悪いそうだが、こういうものを食べなくてはいけない」

と云われるままに、青臭いのをがまんしながら、五つも六つも口の中にほうりこんでいると、

「あ、君は独身だったね。それは大変だ。成年の未婚者がこれを食べると、まちがいを仕出かすおそれがある」と云われた。

あとで考えると、これは最初に「結婚はすべきでしょうか、すべからざるものでしょうか」などと不躰^{よしつけ}な質問を発したことをたしなめるためのタクラミのようにも思われた。

ずいぶん気むずかしいところもある方だとうかがっていたのに、その後もお会いするたびに、かならず失態を演じたり失礼にわたる言辭をろうし、あとになって冷汗の出るような想いをするのである。その場では何も云われず安心していると、こまかなことまで皆見透されて、しまったと気がついたときには、もう及ばない。こんどから氣をつけようと思っ
ても、あとで想いかえすと、かならず赤面するようなことを仕出かしている。あたかも強いバツターに向うと、思わずピッチャーの方でも失投してしまうようなものかもしれない。

それにしても、井伏さんのお宅にうかがった次の日から僕は、恋愛中の女性について、それほど思い悩むことがなくなっていた。ことによるとマタタビは、僕にはネコの場合と逆の作用をおよぼしたのだろうか。それとも井伏さんの「人徳」のせいだろうか。いつか小山清氏が井伏さんのことを、《ひとを昂奮させる人》と書いていたことがある。なるほど、たしかに井伏さんは人を昂奮させる。失態や失言を犯したり、また些末なことまであとになって氣になるのは、そのときこちらが昂奮しているからにちがいない。だとすると、僕らには井伏さん自身が、猫にマタタビなのだろうか。

知らぬが仏

面と向って僕は、「井伏さん」と呼んだり、「井伏先生」と呼んだり、いろいろであるが、どれも落ちつかない気がする。「先生」はものもののしく、「さん」はなれなれしい。こういうことは別に、井伏さんに対してだけ起ることはない。「君」、「氏」、呼びすて、その他いろいろの尊称の使い別けは、いわば僕ら日本に生れた者に課せられた宿命的な苦役のようなものであるから、いままさら云っても仕方ないことだ。しかし、それを特に井伏さんに対してだけことさら強く感じるのは、どうしたわけだろう。

いつか小山清氏が、井伏さんの歩き方を見て、《カンの強い人だと思った》と書いていた。檀一雄氏も『小説太宰治』のなかで、井伏さんが真新しい下駄をはいてセカセカと小刻みに歩くさまを、じつに巧みにとらえて一種不安な情景の効果を盛り上げていた。

そういえば井伏さんの歩き方は独特のものだ。井伏さんの周囲にはいつも、ものやわらかな調和のある空気がながれているが、それは坐って酒でも飲んでおられるときの井伏さんのことで、一つの場所から他の場所へうつるときの井伏さんには、身も世もないと云っては袈裟になるが、なにか逆らうべからざるものに対してまで敢えて逆らうといった趣きを感じ

られる。道路にさからい、風にさからい、下駄にさからい、敷石にさからうといった感じである。それが傍の者には、不安を呼び、あるいは《カンの強い人だ》という気持にさせるわけだろう。とにかく、まったく妥協のない人の姿勢であるように思われる。

井伏さんの文章を読むと、はじめはその優しさと温かさにとひきこまれるが、いつか或る仮借ないまでに強い何ものかにつつかるときがくる。どの個所を、どうと指摘するわけにも行かないが、眼に見えない強い動物電気のようなエネルギーが、文章の全体にながれているのを感じるのである。志賀直哉氏の文章にも、こういったエネルギーは感じられるのであるが、いってみればそれは絶えず一定量ながれている電気のようなもので、はじめから強い電気であることが誰の眼にもよくわかる。それにくらべて井伏さんのは、いつ、どこから、どういう具合にながれてくるのかわからない電気なので、衝撃をうけたときの驚きは、一層つよいのである。

はつきり云うと、僕は井伏さんのとなりにいると、いつ叱られるか、いつ怒られるかと、心配でならない。もう一つの不安は、叱られれば、どんなように叱られ、あとでどんな気持になるのかサッパリ見当がつかないことだ。吉岡達夫や藤原審爾が、「いや、この間は親じさんにおこられた」と云っているのを、まれに聞くことがあるが、彼等にも、どんなことで、どんな風に怒られたかは訊き出すことができないのである。まさか殴られたわけでも、せっかんされたわけでもないだろくに、四十男が子供のようにな、叱られた、叱られた、としよげ

ているのは、よほどの苦しみを受けたにはちがいないのだが、一体どんなことがあったのか「叱られた」ことの内容は、すこしも実体をつかみ得ない。……だが考えてみると、こんなことを云っている僕は、ひどくノンキな人間であるかもしれない。非常に手きびしく怒られているのに、そして傍のものにはそれがハッキリとわかるのに、自分一人はそのことにまるで気がついていないのではなからうか、とそんな気もするのである。五味康祐の剣豪小説に、首を斬られた男が、あまりにあざやかな斬られかたに、まるで生きたままのように百歩も歩いて、はじめて首が胴からころがり落ちるといふ話があるが、自分もそんな叱られかたをしてはいはないかと不安になるのである。

『鯉』の想い出

中学四年のころ、ラジオで新進作家の文章の朗読をきいた。短い、十分間かそこいらで終る放送だったが、その新鮮な印象は後まで残った。

井伏鱒二氏の小説は『多甚古村』が評判になったころから読みはじめた。あのラジオの放送をきいてから三、四年もたっていたが、多甚古村巡査の駐在日記を読みながら、ふとあのラジオの文章を書いたのは、この人ではないかと思うようになった。だから、それから一年ばかりたって偶然、親戚の家の書棚にあった中央公論社版『文壇出世作全集』のなかで『鯉』を見つけ出し、文字で書かれた文章として読んだときには、二重の感動を味った。文章そのものに對する感動と、何も知らずに聞いていたラジオで朗読された文章がやっぱり井伏鱒二氏のものだったという感動と。

今日ではすでに十幾年前から私は一びきの鯉になやまされて来た。～ではじまる文章を、たいいてい的高校生が知っているようだ。けれども当時の私は、まるで自分一人が『鯉』を発売した気で得意になっていた。

井伏文学の洗脳力

尾崎一雄氏の《志賀(直哉)先生は松で、自分はヤツデだ》という言葉は有名である。無論これは単なる自己卑下などではなく、自分をヤツデにたとえようと何だろうと、確固とした自己主張であるにちがいない。尾崎氏が志賀氏から何を学び、またその影響下にあつて自分をまもり通すために、どんな苦勞を重ねたかは、私は全然知らない。私にわかるのは、ただその苦勞が並大抵のものではなかつたろうということだけである。

じつのところ、私たち以後の時代の者にとっては、この尾崎氏のような苦勞はあまり縁がないことかもしれない。いってみればそれは「文章の神様」が存在した時代の人にしかない悩みであり、愉しみであつたわけだろう。いまはヤツデも松も要するにシヨクブツであるにすぎないのであろう。……たしかに私たちは、ものを書くのに、戦前の人たちのような遠慮も気兼ねもいらなくなったようだ。しかし個性のある作家の個性的な文章に、まったく束縛されることがないかといえば、やっぱりそういうわけには行かない。誰の文章を神サマにするといった序列や権威づけの風習はなくなつても、文章の中の神サマはやはりちゃんと存在しているようにも思われる。たとえば私は井伏鱒二氏の文章を読んだあとでは、しばらくは